

明暦の大火と江戸の改造

江戸幕府による江戸城建設や町づくりのために、上方（関西）や近くの地方から、大ぜいの人々が、江戸の町に集まってきていた。人口密度が高くなった江戸の町では、水の不足や火事の心配が増していた。

＜拡大する江戸の町＞

短い期間で人口が増えていた江戸では、新たな町づくりが必要だったが、都市の整備が追いついていなかった。そんなときに発生した明暦の大火は、大規模な都市改造のきっかけとなった。

町中を焼きつくした大火

1657(明暦3)年1月、本郷、小石川、麴町の3か所で連続して発生した火事は、3日間にわたって江戸の町の約6割を焼き（→p.48）、約10万7000人といわれる死者を出した。火事の原因は、放火と考えられている。



火に追われて京橋から落ちる人々
1661(寛文元)年に出された『むさしあぶみ』は、明暦の大火を物語にした本。橋が焼け、川に落ちた人々や、落ちた人々が折り重なって亡くなったようすが、さし絵入りで書かれている。

明暦の大火以前の江戸
江戸城を中心に、武士の屋敷(武家地)や寺・神社(寺社地)、町人町(町人地)が集まっていた。隅田川の対岸の本所・深川方面は、まだ開発されていなかった。

1644(正保元)年ごろの江戸



武家地	町人地	寺社地
現在の中央区	現在の中央区	現在の中央区

●武家地・寺社地の郊外への移転と埋め立て地の拡大
人口が増えたことと、火事の被害を少なくするために、武家地や寺社の郊外移転が行われた。合わせて、現在の銀座東側の海岸(築地)や赤坂などの沼地を埋め立てさせ、子どもたちに職をゆずった大名などが住む中屋敷や別邸の下屋敷、そして寺社を、埋め立て地に移転させた。



埋め立て工事は、門徒(信者)だった佃島の人たちも行ったんだって。



1843(天保14)年ごろの江戸



武家地	町人地	寺社地
埋め立て前の海岸線		

築地に移転してきた本願寺
横山町(現・日本橋横山町)にあった本願寺(現・築地本願寺)が、埋め立て地の築地に移転してきた。埋め立て工事は、本願寺が行わなければならない(→p.137)。

郊外にのびている町人地は、五街道(→p.25)沿いにできているんだよ。



明暦の大火で、江戸城の本丸と天守閣(→p.16)も焼けたんだって。



明暦の大火後の江戸
武家地が郊外に広がり、寺社地も郊外にできている。海は埋め立てられて、江戸の町が大きく広がっている。



江戸橋広小路にみる防火対策
火の見やぐらや広小路がつけられている。また、屋根をかわら葺きにしたり、川沿いの倉庫を土でつくった壁にするように御触を出したりした。

江戸大改造の3つの柱

焼け野原となった江戸では、都市改造がはじまった。改造は、**①防火対策**、**②都心部の再開発と埋め立て**、**③江東地区(本所・深川)の開発**が、大きな柱となった。

●防火対策

- 町を改造して、火事が燃え広がらないくふうをした。
- 道幅を広げた。
- 広小路や火除地という空き地をつくった。
- 火の見やぐらという高い塔をつくり、早く火事を見出し、周りに知らせるようにした。
- 町ごとに、防火用の井戸や水を入れた桶を置くようにした。

再建されなかった江戸城天守閣

明暦の大火で焼けた江戸城は再建されたが、天守閣はつくられなかった。戦がなくなった江戸時代には、天守閣は必要ないと判断されたのだ。このことは、城が戦のとりでから、政治の場所になったことを示している。



天守閣は、住むところではなく、戦のときに城の主が指揮をとる場所だった。

●江東地区(本所・深川)の開発

大火後、それまで大半が田畑だった隅田川対岸の江東地区(本所・深川)には、火事で燃えないように、町なかにあった木材置き場や商店の倉庫、米蔵が移転してきた。また、隅田川には新しく橋がかけられて、江東地区は、人と物が行きかう土地となった。

大火後につくられた両国橋

江戸幕府は防衛のために、隅田川には橋をかけていなかったが、大火後に新しい橋をつくった。この橋は、はじめは「大橋」とよばれていたが、隅田川が武蔵国(現・東京都、埼玉県、茨城県の一部)と下総国(現・千葉県、茨城県の一部)の境界であったことから、「両国橋」という名がついた。

